

「確かな学力の定着を目指した授業改善の工夫」

～学ぶ楽しさや分かる喜びを味わえる効果的なRPDCAサイクルを通して～

I 研究の内容

(1) 児童の教科及び生活習慣や学習習慣の状況把握と改善すべき課題の整理

⇒ 課題として

国語において、「読むこと」領域や漢字の読み書き、社会科において、資料の読み取りと活用能力に課題がある。生活実態については、就寝時刻や起床時刻が遅いことと、メディアへの接触時間が長いこと、さらには家庭学習が定着していないことに課題がある。

(2) チャレンジタイムのとりくみ（8：20～8：35）の15分間をしっかりと確保する。

月-朝読書

火-国語タイム〈漢字・意味調べ〉

水-算数タイム〈基礎的・基本的な四則演算，文章題対策，ドリルなど〉

木-チャレンジタイム〈ミニテスト，読み聞かせ，音読〉

金-朝読書

(3) 家庭での学習のあり方・保護者との連携

- ・家庭学習の手引きについて各学年で検討し，学校独自の手引きを作成し配布。
- ・家庭学習時間の目安〈学年×10分〉の定着を目ざす。
- ・とりくみ方について，各クラスで指導。

(4) 学習規律や授業ルールの確認（環境面含む）

- めあては青，まとめはピンクで囲み，意識を促す。
- 教室前面には余計な掲示物は貼らない。学習規律定着に向けた掲示物のみとする。
- 多様な価値や考えに触れるような授業過程の工夫をする。自力解決の時間を確保する。
- できるだけ自分の考えを，言葉で書く活動を多く取り入れる。
- 学習形態の工夫〈個 → ペア → 小集団 → 全体〉
- 児童の言語環境を整える掲示物等の工夫（新聞コーナー・学習掲示）

(5) 説明文の読解力向上を図る授業づくり

国語科では，説明的文章の読解を中心として授業改善プランの作成を進めた。単元全体を通してゴールとなる成果物を意識し，目的意識を持って読み進める指導過程を計画した。従来の基礎・基本をもとにした読解力育成の授業に加え，興味・関心を高める導入の工夫や，言語活動の充実を目指した交流の場作りなど，子どもが「主体的に考える」授業づくりを進めてきた。

■用語を知る。

説明文の読みにおける基礎・基本の一つである用語の具体的な内容や，その内容を含めるための具体的な方法をしっかりと指導する。「段落」，「形式段落」，「要点」，「要約」，「要旨」

■説明文の読みの活動

「形式段落に分ける」，「段落の要点をまとめる」，「意味段落に分ける」，「文章構成図を書く」，「要約する」，「要旨をまとめる」などの活動の中で，基礎・基本を活用して，積極的に文章に立ち向かう読みができるようにする。

■説明文の特徴と必要な指導事項の明確化

教材の持つ特徴をしっかりと捉え，読解に必要な指導事項を明らかにすることによって，読解力の育成を目指していく。

(6) 資料の活用能力育成から社会的認識を高める授業づくり

社会科については、児童が「自分から調べてみたい、もっと知りたい」という興味・関心の高まりが社会科の醍醐味として、知識を詰め込むだけの授業にならないように展開を工夫した。本校の課題は一昨年「資料の読み取りとその活用」にある。国語と同様、「身につけさせたい力と指導内容」を明確にするため、昨年度から「知識を整理した図」を取り入れてきた。考えて身につける知識は単元を通じた学習問題の設定につながり、調べて身につける知識やおさえない用語は、毎時間の授業での学習課題を解決するための手立てにつながっている。従って、各時間の学習内容を教師も児童も確認できると同時に、この図を使って振り返りにも生かすことができた。

また、今年度はまず、学習課題に向けて自力解決の時間をしっかり確保し、ペアやグループなどで話し合う言語活動を取り入れる指導過程を作ることを意識してきた。2つ目は表やグラフの軸は何を表すのか、表題は何か、一目盛りは何を表しているかなど、資料の読み取りに必要な事柄をしっかりとおさえるために「資料の読み方名人」を活用することを意識した。その際、3・4年生は地図やグラフなど基礎的な資料1つからの読み取りを、5・6年生では複数の資料を関連させて読み取ることで基礎的な知識の定着を図り、社会的な認識を深めることにつなげてきた。

II 成果と課題

1 成果

- ・各種学力検査やQU検査、生活実態調査をもとに本校の実態を分析し、学力面や生活面の課題を明らかにして研究を進めることができた。また、課題解決に向けた研究内容を共有することができた。
- ・学習における課題を把握した上で、国語科では「読むこと」領域の改善プランを、社会科では「資料活用」についての改善プランを改訂することができた。
- ・国語科では「読みの基礎・基本」を生かして、用語を丁寧に指導し、説明的文章を読み取ったり要約したりする指導過程を工夫することができた。
- ・社会科では「知識を整理した図と問いの構造図」を作成し、身に付けさせたい力と本時の学習課題を明確にすることができた。また、社会的な見方・考え方を指導計画に位置付け、教師側が意識して指導することができた。
- ・国語科・社会科・特別支援教育の自立活動、生活単元学習において、昨年度の授業の課題点を改善し、校内での検証授業を行うことができた。
- ・朝のチャレンジタイムを通し、特に国語や算数の基礎・基本を定着させるためにドリルや漢字練習に取り組んだり、読書の習慣化を図ったりすることができた。
- ・独自に生活実態調査を3年間継続して行い、生活の中からも課題を見つけ研究に生かすことができた。学習の定着と生活向上には大きな関わりがあり、全学年の発達段階に応じた授業を行うことで、早起き早寝やアウトメディアについて、家庭と連携しながら進めることができた。保護者からも、家庭内の生活を見直す良い機会になっているという声が多数寄せられた。
- ・公開授業研究会を行い、たくさんの実践内容、授業のアイデア等を近隣の学校に提案することができた。個々の研究に対する意識も高まり、主体的に研究することができた。

2 課題

- ・国語科と社会科の授業交流ができれば良かった。それぞれの課題を共有するのが難しかった。

III 成果物

- ・研究授業、授業実践の指導案、ワークシート、資料等
- ・国語科における「読みの基礎・基本」「話し合いのスキル系統表」等の資料
- ・社会科における「知識を整理した図と問いの構造図」及び、学年の系統表
- ・身に付けさせたい力を明確にした各学年の「授業改善プラン」
- ・生活向上に向けた取組に関する資料（「早起き早寝チャレンジ」「アウトメディアチャレンジ」）

（ 研究主任 小椋 規雄 ）